慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バルベー・ドールヴィイ『歴史の一頁（一六〇三年）』（翻訳）
Sub Title	Barbey d'Aurevilly, Une page d'Histoire (1603) (traduction)
Author	Barbey d'Aurevilly, J. (Jules)(Kanazawa, Tetsuo) 金澤, 哲夫
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature Françaises). No.44 (2007. 3) ,p.106 (23) - 128 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070331-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バルベー・ドールヴィイ『歴史の一頁（一六〇三年）』（翻訳）

金澤哲夫 訳

I

私の生地であるノルマンディーに毎年のように探し求めに行くあらゆる印象のうちで、その深さによって個人的な思い出に加えることのできる印象を、今年はただ一つしか見出さなかった。個人的な思い出というのは、それらが実に亡霊の力を持っていると書いてしまえば、その――非常識とも言える――力を語ったことになるであろう……私が住んでいる、西部のこの地方の町[1]、――私の幼年期において町をかくも輝かせていたものをすべて喪い、今では見捨てられた石棺のように空ろで寂れた町――この町を私はずいぶん昔から「わが亡霊たちの町」と呼んできたが、それは、この町に住むゆえに私を咎め、そして驚く私の友人たちにしてみれば理解不可能な愛を正当化するためであった。この町にかくも奇妙に私を結びつけているのは、実際、消え失せた私の過去の亡霊たちなのである。そこに戻り来る亡霊たちが無ければ、私もこの町に帰り来ることはないであろう！

明るい色の敷石を敷き詰めた人気のない街路を通ってこの町を歩み行く時、それらの幽霊がいつも必ず私に付

許を去ることのない亡霊たちの陰鬱な行列に恐らくは、私はそれをとても懸念するのだが、加わろうとしているこの二つの亡霊の物語――時によってかき消されたその痕跡を、ある一族の恥辱と最期を、私が奔走して出来る限り拾い集めたこの物語には、まるで運び去る馬のたてがみに執拗にしがみ付く虻のように私の魂に食い付いて離れないこの物語には、まさに謎の持つあの幻惑的な力が、人々の想像力にとってあり得る最大の詩が、――そして恐らくは、これら無知の劫罰に処せられた者たちにも理解可能な、残念ながら！唯一の真実がある。

それは起ったのだ、その上、この秘密の出来事は、それに最も相応しくない地方で、しかも確かにそれを最もよく隠さなければならなかった場所で！　そしてそれはそこでは隠されたのだった……そしてしばらく前には、また今この時にも、最も熱烈な好奇心によって死後に払われた努力にも拘らず、それはそこでは未だよく知られていない！　その現実の底までそして奥底まで知ることの不可能な、それを切り開きそして締めくくった斧の一撃の閃きによってのみ照らし出されるこの物語は、あまりにも罪深い愛と幸福の物語であったので、それについて考えるだけでも人の心は恐怖で震え上がり……そして魅了される（神よ許し給え！）、不安をかき立て危険を孕むあの魅力によって。その魅力は、それを感じる魂をほとんど罪あるものとし、そして魂を、あるいは妬み深くも分ち合うということがないでもない罪の共犯者にするように思われる……

Ⅱ

かくも罪深いからにはかつてないほど並外れていたに違いないこの愛とこの幸福が闇に包まれた、そしてその闇が、闇とは常にそうであるように、抑制できない感情によって暴かれた時代においては、人々の心には、しかし、目覚しい活力があった。後に続く時代におけるよりもっと雄々しかった情熱は、ある音域に上り詰めたのだ

き添ってくれる。彼ら、その幽霊たちは、時刻とは関りなく私たちに付き纏い、夜に限らず現れて、私たちのカーテンをカーテンレールの上で引き寄せ、そうして、かつて彼らの口であったもの、そこには私たちをかつて酔わせた呼気がもはや見出されないものを、私たちの口に押し付けてくる！……私にとっては、宿命的に付き纏うこれらの亡霊は、昼間でも、その明るさが彼らを追い立てることのない街路にまでも現れて、そこで私のそばに立つ。それはこの上なく日の照り輝く日中のことなのだが、まるで彼らは夜の中に、彼らの愛する包み込んでくれるような夜の中にいるかのようである。だが、もしも夜になったとしても、夜の闇の中に彼らの姿を私はよりよく見分けられるわけではないであろう……幾度、稀な通行人が、墳墓のごとくに青ざめて美しい、この死に絶えた町の死に絶えた街路を憂鬱に歩き回る私に出会ったことだろう、そして、私は独りではなかったのに、私を独りだと思ったことだろう！　私は私の回りに実に大勢の者を連れていた——実に大勢の故人たちで、彼らは墓から出て来るように、私の歩んでいる敷石から出て来て、葬送の一群をなし、私にしつこく付き従うのだった。彼らは私の両肘にまで押し寄せていた。そして私は彼らを、その見覚えのある顔とともに見ていた。ハムレットがエルシノアの高台で父の亡霊を見たのと同じくらい鮮明に、同じくらいはっきりと。[2]

しかし、私が今日語りたいと思うのは彼ら——なじみの者たちや親密な者たち——についてではない、私の身内の亡霊たちについてではない。別の、二人の亡霊について語りたいのである。今年、歴史上の三世紀を隔てて、やはり私の目の前に現れ、私が彼らを生きている実体、目に見える生身（なまみ）の人間として知ることがあったかのように私の中に食い込んだ二つの別の亡霊のことである。体というものはいずれも透明ではないという条件の下に——私たちの最も愛した者たちが私たちの夢の抱擁しかもはや私たちについてはとどめていず、私たちの心にとっては永遠に疑念の、悔恨の、そして絶望の謎であり続けるだろう！というこの呪われた生の条件の下に彼らが存在したということを確信するためには、目でそして手で彼らに触れなければならないのだが……もはや私の

者たちであり、彼らはこれらの罪に彼らの罪を加えたのだが、彼らの罪は、彼らの祖先でも犯さなかったであろう。実際、この罪の中には、少なくとも、――破滅した一族の遺伝的な悪徳によって、確かに、道を誤り、汚染され――突然に迸り出る、再び現れた人間の本性が見出されたが、この本性はもうずいぶん昔から見られなくなり、このラヴァレー家の冷酷な胸の内に見出され得るとはもはや考えられることさえなかったものなのである！

Ⅲ

皆が、代々、特別に情け容赦のない人間たちであった。皆が、例外なしに、魂の中で人間的な感情を、人間を殺していたように、押し殺したのだった。恐ろしい彼ら一族の最も際立った性格は残忍な冷酷さだった。断固とした、かつ御し難い気性の持主たちで、その情熱は虎のように飢えていたのであり、世界は自分たちのために創られたと考え、そしてただ朝食の卵を焼くためにも一つの町をすっかり焼き払ってしまったであろうような連中だった。彼らが放蕩しようなどと思いついた時、その放蕩はついには流血に至り、そして死を招くものだった……ある日、彼らのうちの一人が、従者の調馬師の一人から彼の愛する娘を奪い、凌辱したのち、城の壕の中で九柱戯の球[10]を投げつけて殺してしまった。彼にとっては、その娘はもう一本の九柱戯の柱に過ぎなかったのだ！　別の男は、この呪われた城では習慣的によく見られた夜の酒宴から酔って出て来て、その朝聖体拝領に出席し、それを拒んだ司祭の体を剣で刺し貫いて、祭壇のまさに階段の上で、聖体のパンを持ったまま惨殺した。三番目の男は、自らの手で弟を殺害し、一族にカイン[11]の印を付けたのだったが、ある日その刻印をそこに再び見出すことになっていた……普段は何ものを前にしても震えることのない地方で、ラヴァレー家のことを考える時には誰もが震えおののいていた、そしてこの悲劇的な者たちに対する恐怖が大層強くなったので、いつかそのう

ったが、その後はそこから下ってしまった、そしてそこまで再び上昇することは多分決してもうないであろう。それは一六世紀が――カトリーヌ・ド・メディシス[3]により、そして、フランスのボルジア家[4]であったあのヴァロワ家[5]の一族によりイタリア化された、熱狂と堕落のあの世紀が――終りを迎えようとする頃のことであった。その頃、ノルマンディー――頑健な体格の人々が他の場所におけるよりもよりよく自らを制御している、堅固なノルマンディー――には、一四〇〇年頃ブルターニュからやって来て、幾世代も前から、土地を所有することによってノルマンディー人になった領主の一家があった。その一家は、英仏海峡の沿岸の、シェルブール[6]の東、そこからほど遠からぬ所、一つの塔によって要塞化され、その塔（トゥール）に因んでトゥールラヴィル[7]と呼ばれるある城に住んでいた。中世のすべての城のように、それは長い間戦争用の要塞であったのだが、ルネサンス期の柔弱な天才が改築して、犯罪的な情熱と快楽を隠すために、そして、のちに成就した運命のためにその城を準備したのだった。

そこに暮らしていたこの一家はそうとは知らず宿命的な名を持っていた。それはラヴァレー家というのであった……そして、事実、一家はある日それを失墜させることになるのであった、この不吉な名を[8]！　最後の二人の末裔の罪の後で、この一家は自らをその名から破門した。その名を持つ恥辱から自らを拭い取り、かくして死んだ状態になる前に自ら命を絶って死んだ。

この一家は、そもそも、死ぬに十分値したのだった。ただ、罪を犯して断罪された他の家族のようには死ななかった。この一家のために神は痛ましい例外を作ったのである。神の掟をすべて犯した、この、神の無法者（アウトロー）一家[9]は、最後には、神への贖罪の摂理の掟を犯す運命にあった。この一家においては、彼らの罪と彼ら一族の積年の罪のために償いを払ったのは、冒瀆的で、堕落しそして凶暴な一家の中の最も罪深い者たちではなかった。それはまた無垢の者たち――無垢によってすべてを贖う無垢の者たちでもなかった！　ラヴァレー家には、無垢の者はいなかった。そうではなくて、それは、祖先の罪とは、祖先の犯した忌わしい一連の罪とは異なる罪を犯した

のあるいは青春期のいかなる時に、彼らは心の奥底に密かに眠る近親相姦の班猫を見出したのだろうか、そして二人のうちのどちらが他方にそれがそこにいると教えたのだろうか？……疑念の呟きが大きくなり醜聞が音立てて爆発する前に、どのくらいの間彼らの息詰まるような幸福は続いたのだろうか、後悔と羞恥に途切れはしたが、間もなくそれも押し殺すほどに十分に力強くなった幸福は？……二人は離ればなれにされ、実際、父親の有無を言わせぬ権限によって、息子は遠くへ追放され、娘は結婚させられたのだが、息子は突然雷のように城へ舞い戻り、つむじ風のように彼の妹を連れ去った。どこへ彼らは彼らの幸福と罪を貪りに行ったのだろうか、地上の楽園を地獄のような感情の中に見出していたこの二人の者たちは？……空しい問いである！　それは人々の知るところではなかった。一年以上の間、彼らの足跡は失われ、ようやく見出されたのはパリにおいて、一二月のある悲しい日のことであった――しかし、今度こそ、消し去ることのできない――死刑台の上に！――しかも血まみれの足跡であった。私たちにとってはその石がまだ近親相姦をにじませているこの城の壁だけが、そして、その下蔭にあるいはその水面にかくも甘美にまたかくもおぞましく幸せな二人の姿を目撃したが、見たものについて何も誰にも打ち明けなかった森や水辺だけが証人となった愛の、この内密の奥深いドラマについて黙っている伝承は、魂の中を見つめることのない粗雑な伝承は、近親相姦という憤慨の言葉を書いてしまえば、そして二人の近親相姦者が美しい頭を斧の下に横たえた断頭台を指差してしまえばもう何もすることはない。二人の頭はあまりに美しくて、乱暴な伝承でさえも美しいと認めた程であり、この心理的には奥まで窺い知ることのできない物語において、伝承も忘れなかった唯一の細部はこの驚くべき美しさに基づいているのである。マルグリットの美しさは実に大層な美しさであったので、これからまさに彼女の死に場所となる台の上への階段を登りつつあった時、そして襞が体に絡みつくことなく、よりしっかりした足取りで登れるようにスカートを赤い絹の長靴下の上にまくり上げていた時、その美しさは、太陽の照射のように、彼女を殺そうとしている死刑執行人の感覚と手を

ちに、彼らからは、もはや男とか女の顔をした人間ではなくて、見たことのない形や顔を持った存在が生まれるのが見られるだろうと人々は予期し、また、ラヴァレー家の女が一人妊娠する度に、この地方の人々は好奇心と激しい恐怖に身震いして言ったものだった。「あの腹から何が我々の目の前に生まれ落ちてくるのだろうか？あの腹は我々の地方にどんな恐ろしいものを吐き出すのだろうか？」しかしこのおぞましい期待は裏切られた。人々は怪物が生まれるのを予期していたのに、この上なく純粋に美しい二人の子供が、ラヴァレー家のこの血の沼から、ある日、突然、二輪の薔薇のように誕生したのであった。

奇妙なそしてもの悲しい類似よ！　ラヴァレー家の盾形紋の中には、先のとがった一輪の薔薇が咲き誇っていた。彼ら一族の先端にもまた二輪の薔薇があったが、この二輪の二重の花冠の中には班猫（はんみょう）[12]がいて、それが炎のうちに死を彼らに注ぐことになるのだった……ラヴァレー家のジュリヤンとマルグリット、無垢さながらに美しいこの二人の子供は、祖先から受け継いだ兄弟殺しの一族を近親相姦によって終らせた。彼は、男の方は、憎しみのカインであった。彼らは、二人して、愛のカインだった、憎しみに劣らず兄弟殺しに至る愛の。というのは、愛し合いながら彼らは、二人ともに望んだ近親相姦の短刀を互いに二重に突き刺して、殺し合ったのだから。

悲しいかな！　彼らはどのようにしてそれを望んだのだろうか？　彼らはどのように愛し合ったのだろうか、当時の世間が彼らの愛を非難する以外はいかなる非難の声も決して上げなかった、この不運な者たちは？……近親相姦をかくも稀な罪にするもの、それは慣れである。彼らが育てられた孤独な城で、ラヴァレー家のジュリヤンとマルグリットは、どうやら、互いに十分に慣れ親しんだ結果、彼らの危険な美しさは彼らの魂にとって致命的ではなくなってしまったらしい。しかし彼らはラヴァレー家の血の最後の一滴であったのであり、彼らの宿命的な愛は、人に譲り渡せない彼らの相続財産であったということかもしれない……それが存在していることに人が気づいた時には多分既に大きく育っていたこの不吉な愛の起源を、誰が果して知りえただろうか？……幼年期

彼らは情熱をよりよく燃え上がらせるために情熱に純潔を混ぜ合わせていた！

ノルマン人の血を引くと誇っていたバイロン卿こそがとりわけ、イタリア年代記のように情熱的なこのノルマンディーの年代記を、詩への直観をもって書くのにふさわしかったであろう。その年代記の記憶も今となってはもはや、かくもゆったりと力強く呼吸するこの平穏なノルマンディーの上にただ漠然としか漂っていないのだが。

最近、トゥールラヴィルの美しい近親相姦者たちについての記憶を呼び起した人々は、この二人の塵よりも彼らの城の塵をかき回したのである。それは建築家の精神の持主たちであった。文芸復興（ルネサンス）が、アルミッド[18]自身が、アルミッドの城に変えたこのかつての城館を、彼らはこと細かに描写した。だが彼らが知り得たのは、ただ城の石のことばかりである。やれやれ！　これらの石の間に生きて、そこに彼らの魂を幾分なりとも残した、ラヴァレー家の二人の末裔の二つの亡霊は、真夜中の暗闇の中に、これらの物静かな人々の想像力の足を引っぱりにやって来ることは決してなかった……彼らのうちの一人が、しかしながら、夕闇の中に逃げ去るラヴァレー家の女の白いドレスが、森のとある小径の曲り角に翻るのを見るように思った、とどこかで語っている。しかし彼は彼女のあとを追いかけなかった……亡霊たちのあとについて行くためには、修辞学の文彩以上に彼らを信じなければならない。それほど修辞家でないこの私は、私はもっと運がよかった……探し求めにやって来たものを追いかける必要が私にはなかった。私をやって来させた亡霊たち、私は彼らをこの城の至る所に、生きていた時と同様に死後も絡み合った姿で見出した。悲劇的にも愛のこもる落書きの、そしてその中には果敢にも受け入れた宿命に対する誇りが今なお息づいている落書きの、書き散らされた壁の上張りの下に二人してさ迷っている彼らを私は見出した。私は彼らを八角形の塔の閨房の中に見出し、そこで彼らのそばに座って、この青味がかった閨房の小さい寝台の上にありもしないぬくもりを探したのだが、その凍りついた繻子織の布地は月光を浴びる墓地のベンチと同じくらい冷たかった。私は彼らを暖炉の細長い鏡の中に見出したが、彼らは青ざめて陰鬱な、幽霊の目

惑わしたが、彼女は男の顔を屈辱的に打って彼の無礼な狂気の沙汰を罰した。

それはアンリー四世[13]が君臨していた、一六〇三年一二月二日、グレーヴ広場[14]での出来事であった。この王は、偉大なという綽名に善良なという綽名を絡み合わせ、それをおよそ君主たる者が持つことのできる最も光栄ある組み合わせ文字としたのであるが、どうやら彼の善意が彼の正義の斧を振り下ろそうとしてためらうのを感じたらしい。しかし彼の妻、マルグリット・ド・ヴァロワ[15]（罪人と同様に彼女の名前もまたマルグリット！）が、彼の中の審判者をより強固にした。彼女は自らの責任に帰するべき近親相姦を自らの魂の上に数多く積み上げていたので、マルグリット・ド・ラヴァレーの近親相姦の中に彼女自身を罰したのであった。

Ⅳ

さて以上が、この悲しくも残酷な物語について知られていることのすべてである。だがこれより更に人の情熱をかき立てるものがあるとすれば、それはこの物語について人に知られていないことなのだろう！　ところで、歴史家たちがもはや何も知ることなく立ち止るところに、詩人たちが現れて推察する。歴史家たちにはもはや見えない時にも、詩人たちにはなお見える。詩人たちの想像力こそが、歴史の厚い綴れ織を貫いたりあるいは裏返したりして、それが我々に対して覆い隠すものによって人の心を魅了するこの綴れ織の背後にあるものを見つめようとするのである……ラヴァレー家のジュリヤンとマルグリットの近親相姦、恐らくは未刊のままにとどまるであろうこの一篇の詩、それをあえて書こうとした詩人は未だに見出されていない、まるで詩人たちは困難を不可能とまで考えて好まないかのように！　そのためには、『ルネ』を書いたシャトーブリアン[16]のような、あるいは、『パリジナ』や『マンフレッド』を書いたバイロン卿[17]のような詩人が必要だろう。二人の純潔な至高の天才、

出によって鮮やかに蘇る記憶の中でポーズをとったのである。

この肖像画の中で、彼女は立ち、全身が描かれている――完全に正面を向いて――そして彼女を取り巻く愛の神々を見つめずに（これもまた、彼らが肖像画に描き加えられたということの証拠となる）、見物人を見つめている。彼女は城の中庭にいる、そして歓待の身振りで美しい右手を開き、肖像画を見つめる人を丁重に城に案内しているかのように見える。この絵を支配しているもの、それは、ほとんど威厳にまで達する、飾り気のない気品ある物腰をそなえた女城主であり、それはまた、夢想も柔弱さも持たず、心に非常に恐ろしくのしかかったに違いないものの重荷を負って悩みやつれる目差も持たずに、澄んだ目をしたノルマンディーの女である。頭をまっすぐにして、顔は大変にみずみずしい、そのみずみずしさを彼女は死刑台の斧の一撃後に、彼女の素晴しいノルマンディー人の血の果てにようやく失わなければならなかった。髪は金髪――ノルマンディーの娘たちによく見られるあの黄金色で、八月の太陽の厳しい暑さのために黒ずみ、鎌を待つばかりになっている実った小麦の色をしている。それは、同様に実ったこの髪は、しかし別の鎌のために実ったのであって、その鎌を長くは待たなかった！　彼女は短い髪をして、額の上できっぱりと切り、二つの重い房が縮れることなく頬の両側に垂れている――ほとんど、有名な絵の中のエドワードの子供たち[19]のように。彼女は背が高くてすらりとしている、帯を高い位置に締めているにもかかわらず。白色と薔薇色の礼服を着ていて、その布地は編み上げられたように見え、その色は紋章学の用語で言うように交互に組み合わせになっている。この肖像画を見れば、堂々として落着いた、この美しい薔薇色の娘が近親相姦のために道を踏み外したとは、そして狂ったようにそれに身を委ねたとは決して信じることができないだろう……スカートに沿って自然に垂れてはいるが、しかしハンカチを皺くちゃにして、押し隠す秘密のために、そしてそれを押し隠す苦痛のために緊張している左手を除けば、いかなる情熱もここには明らかには見られない。歴史上のそして詩における偉大な女性近親相姦者たちを識別させるような何ものも、

を大きく見開いて、私が去ってしまえば彼らの映像をとどめることのないこのクリスタルガラスの底から私を見つめていた！　最後に私は彼らをマルグリットの肖像画の前に見出したのだが、兄は情熱的にそして憂鬱に妹に言っていた、「なぜお前は似た姿に描いてもらえなかったんだろう。」というのは、愛されている女は、愛にとっては似ているということは決してないのだから！

これらの落書きやこの肖像画は、その真正さに疑いが持たれた。落書きについては、それらが彼ら、哀れな惨めな者たちによって書かれたとは、また、自分たちが罪ある身だと知っていて、その人生を、苛酷であっても当然な父の目の前で自分たちの幸福を押し殺すことに過ごしていた二人の恋人たちが、かくも常軌を逸した不用心とともに、彼らの心の秘密と彼らの近親相姦の激越を壁に書きつけたとは私自身決して認められないだろう！　これらの落書きのうち、ある幾つかは大変に美しいものであるが、いずれも後からそこに書かれたのだろう。*　それらは時代の特性に適っていたのであり、そして時代の特性は、それは狂暴な情熱であった。マルグリットの肖像画の中には、疑わしい細部もまたある。それは、白い翼を持った愛の神々（アムール）が彼女を取り巻いているという細部――異教的な時代の異教的な着想――である。これらの愛の神々の中に、一人その翼が血に染まったものがいる。翼についたこの血は、マルグリットの血塗られた死の後にそこに付けられたということをあまりにもよく示している。だが、愛の神々を別にして、肖像画の人物のことを私は心の底から信じている。たとえ、彼女を描いた不詳の画家の前で生きている姿のままにポーズをとらなかったとしても、彼女の最期であった恐ろしい破局の思い

＊（原注）そのうちの幾つかをここに挙げる。
「一人の男（ひと）だけでわたしには十分。」――「命を与えるものがわたしに死をもたらす。」――「あの人の冷淡がわたしの血管を凍りつかせ、あの人の激情がわたしの心臓を焼き焦がす。」――「二人は一心同体。」――「こうしてわたしは死ねますように！」

の内容から溢れ出ているように見える、ちょうど完全に密封された小瓶のクリスタルガラスを香が通り抜けるように。「友よ、――と彼女は書いている――わたしはパリからのあなたの手紙を受け取りました。それには考慮に値することが幾つも含まれていて、そのうちのあるものについては他の色々なことがわたしには思い出されたのです。わたしが燃やしたあなたの手紙は、それについてのわたしの記憶を新たにして、今もなおわたしの心に至福をもたらしてくれるわたしの富に対するあなたの情熱を改めて大切にするきっかけをわたしに与えてくれたのです……わたしの日々の巡礼はあなたの出発以来悲しくまた憔悴したものになりました、だからわたしがあなたの提案をそれに相応しいように受け取ったということを疑いませんように。そして、あなたが望むことについて、それもわたしが、友よ、あなたの忠実な妹にして友のマルグリットであることをあなたに示すのが適当だとあなたが判断する度ごとに、あなたが完全な満足を得られるかは、わたしにどうにかできるようなことでは全くないでしょう。」別のところで、彼女は彼に言う。「あなたのパリについての話は、わたしにとって命より大切なあなたの情熱の確かな印によってわたしを喜ばせてくれます……」これらの手紙はヴァローニュ発となっていて、そこでは、父がブロワ[22]に行って留守の間、彼女はエスモンドヴィル夫人に預けられたのだが、この婦人が、年老いてはいるけれども荘園を幾つも所有する富裕なジャン・ル・フォコニエ閣下との結婚を彼女に決心させることになった[23]。「わたしたちは彼女が――と彼女は生彩に富んだ表現を用いて語っている――一種の輿の上に半ば横たわっているのを見つけました。彼女は、とても冷淡でとても侮蔑的な一種の憐れみとともにわたしを抱擁したので、わたしは怒りに硬くなったまま、完全に拒絶する寸前でした……彼女はその間も相変らず横になって、指の中で数珠を転がしたり、煙草をつまんでいかにもしとやかに鼻に突っ込んだりするのに余念がありませんでした。こうしたことすべてに対して、わたしは当該のエスモンドヴィル夫人を前に立ったままでした。彼女はあまりに厳しい視線をわたしに投げつけていたので、わたしはそのためにすっかり傷ついていたのです。――（近親

人々に呪われるべくこの近親相姦者を告発しはしなかった。彼女にはフェードル[20]の気違いじみた恐怖も、罪を犯した後のパリジナの凶暴な硬直もない。彼女の罪、他ならぬ彼女の罪は彼女の全生涯であったし、ほとんど揺藍にまで遡るものであるが、彼女はそれを、悔いもなく、悲しみもなく、思い上がりさえなく、決して自ら反逆しなかった宿命への無関心とともに、身に負っている。死刑台の上でさえも、彼女は悔い改めなかったにちがいない、マドレーヌ[21]という名前でも呼ばれていたこのマルグリットは、しかし、愛の罪を犯したからといって悔悛しなかった。その罪は、罪の深さにおいて、エルサレムの娘のすべての罪にまさっていたのである……語るところの非常に少ない年代記は、兄を引きずり込んだのは自分だと彼女が述べた、とだけ言っている。彼女は、嘆くこともなく、抗議することもなく、ちょうど近親相姦を迎え入れたように、そしてあっさりと、死刑台を迎え入れた、なぜならば近親相姦の帰結は、当時は、死刑台であったから。

V

彼女の、そして彼女の兄の手紙は、稀な何通かが印刷されているが、自筆のものは私は見たことがない。兄の手紙は、当時の貴族の若者がパリを通りかかる際に書いたであろうような類のものである。そこでは彼は彼女をマルグリットの代りに、《マルギット》と呼んでいる――魅力的な、ほとんど愛情のこもった短縮形であるが、これらの手紙の中には、人々がそこに探す種類の親密さを示す言葉はただ一つも見出せない。彼らを二人とも破滅させることのできる人の手に彼の手紙が渡るのを見るのを彼は恐ろしく不安に感じていたのだろうか、そして凍え切った恐怖がたわいないことの、また取るに足りないことの偽善の中にそっと隠れていたのだろうか？……彼女は、もっと自由で、私がこれから引用する頁の中で、もっと大胆に振舞った。そこでは、彼女の情熱は言葉

る水の上で震えていた。白鳥たちは、ラヴァレー家の最後の末裔の二つの魂が、旅立って後、この魅力的な姿を借りて戻って来たと思わせもしたであろう。しかし、罪深い兄と妹の魂であるには、彼らはあまりにも白かった。そう信じるためには、彼らが黒い色をしていて、その美麗な首が血塗られていなければならなかったであろう……

【訳注】

（1）コタンタン半島のヴァローニュ Valognes の町。バルベーの生地サン＝ソヴール＝ル＝ヴィコント Saint-Sauveur-le-Vicomte から北北東へ、約一五キロメートルに位置し、叔父の家があって、そこで彼は少年時代を過ごした。後になって、一八七二年以降も、毎年のようにそこへ滞在しにやって来た。

（2）シェイクスピア William Shakespeare（一五六四－一六一六）作『ハムレット』第一幕、第一・四・五場参照。ハムレットは第四場において、エルシノア城の塔の見張り台で父王の亡霊に会う。

（3）Catherine de Médicis［伊 Caterina de' Medici］（一五一九－一五八九）。ウルビーノ公ロレンツォ・ディ・メディチの娘としてフィレンツェに生まれ、将来のアンリー二世と結婚、フランスの女王となるが、その政治的手腕を発揮したのは、息子シャルル九世の即位時に摂政となってからで、陰謀渦巻く困難な状況下、手段を選ばず、聖バルテルミーの虐殺を画策したのも彼女であった。

（4）Les Borgia。もとはスペイン出身の、ローマの家系で、教皇アレクサンデル六世（一四三一－一五〇三。教皇の地位を買収・陰謀で勝ち得、チェザーレやルクレチアなど婚姻外の子を持ったり、スキャンダルを重ね、イタリアの専制君主たちと争い、フランスの王シャルル八世と戦った）、チェザーレ・ボルジア（一四七六－一五

相姦を疑われているのではないかという恐れが始まっていた！）――それから間もなく、一人の老女がやって来てわたしの肩掛をつかみ、有無を言わせずわたしを館の最上階の一室に連れて行き、わたしは夜までそこに一人にしておかれました。」後に、彼女はこのル・フォコニエ閣下との結婚を強いられ、かくして彼女は近親相姦の中に姦通を持ち込んだ。だが近親相姦が姦通を貪り尽した、二つの罪のうち近親相姦の方がより強かったのである。彼女はこの二つの罪の結果子供を持ったが、子供たちは生き存えなかった。それで彼女は人生を振り返らず死刑台に登ることができた、彼女より前に登り、彼女に先んじて死んでゆく兄にじっと視線を注いだまま。処刑の後、王は彼ら二人の死骸を家族に返すように命じた。家族は亡骸をサン＝ジュリヤン＝アン＝グレーヴ教会[24]に埋葬させた、次のような墓碑銘とともに。

「ここに兄と妹が眠る。行き過ぎる人よ、彼らの死の理由を尋ねるな、ただ通り過ぎて、彼らの魂のために神に祈れ。」

サン＝ジュリヤン＝アン＝グレーヴ教会は、サン＝ジュリヤン＝ル＝ポーヴルの打ち捨てられた教会になった。そしてそこを通りかかる人々が、摩滅した墓碑銘の前で祈ることはもはやない。しかし、彼らのために祈る目的で――もしも祈るならば――通らなければならない場所、それはまさにこの城の中であり、そこには彼らが確かに彼らの墓の中より以上に存在しているのである。私は今年、涙に暮れるような秋に、そこを通りかかったのだが、私はかつてこのような憂鬱を見たことも感じたこともなかった。その時は城の廃墟が修復中だったが、私だったら廃墟を廃墟の詩の中に放り捨てておいただろう、というのは、しばしば生よりも美しい死に、塗装をするものではないから。この城は緑色がかった湖に足を浸しているのだが、その時は夕暮の風が湖に数限りない皺を寄せていた……それは黄昏時のことであった。二羽の白鳥が湖の上を泳いでいた。そこにはこの二羽の白鳥がいるだけで、二羽は互いに離れずに、身を寄せ合い、互いに重なり合い、まるで兄と妹のようであって、その震え

絶えず逃走を続けるべく断罪される。

（12）「斑猫」と訳したのは原文では cantharide。cantharide は昆虫で、その粉末はかつて媚薬として用いられた。

（13）Henri IV（一五五三－一六一〇）。ナヴァール国王（一五七二－一六一〇）、そしてフランス国王（一五八九－一六一〇）。マルグリット・ド・ヴァロワと結婚後、間もなく、新教徒に対して企てられた聖バルテルミーの虐殺が起るが、辛うじて難を逃れる。アンジュー公の死により、フランス王位の継承者となる。アンリー三世が暗殺されて後、軍事的成功、新教放棄の宣誓、ナントの勅令を経て強権を確立。マルグリット・ド・ヴァロワとの婚姻解消（一五九九）後、マリー・ド・メディシス（一五七三－一六四二）と結婚（一六〇〇）。四人の子供を儲けたが、また数多くの愛人を持った。快活かつ善良で寛容だが、巧みな政治的手腕を発揮した王として、また老いても色好みとして知られた。

（14）Place de Grève。パリの広場で、かつて失職した労働者の集合場所であったが、一四世紀から一八三〇年までは特に死刑執行の場であった。現在の市庁舎広場。

（15）Marguerite de Valois（一五五三－一六一五）、別名 la reine Margot マルゴ妃。アンリー二世とカトリーヌ・ド・メディシスとの娘で、将来アンリー四世となるナヴァール王アンリーと結婚（一五七二）したが、この結婚が聖バルテルミーの虐殺の一因となった。二人は間もなく別居。彼女は野心家の弟フランソワ・ダンジューの陰謀に加担するが、弟は死亡し、宮廷を追われる。アンリー四世との婚姻解消（一五九九）。やがてパリに戻ったマルグリットは知性と教養を具えた女性として、詩や回想録を書いた。――『歴史の一頁』のこの件に関して、バルベーの作品集の編集者ジャック・プティはバルベーの間違いとして次の二点を指摘している。即ち、アンリー四世はマルグリット・ド・ヴァロワと一五九九年に離婚していて、一六〇三年にはマリー・ド・メディシスが王妃であったこと。そしてマルグリット・ド・ヴァロワが近親相姦の罪を犯したと非難されるようなことはなかった

〇七。一六歳で枢機卿となったが、やがて狡猾かつ残酷な政治家として敵をことごとく暗殺し、ロマーニャ州を、またウルビーノ公爵領を征服。マキアヴェリの「君主論」のモデルとなった）、ルクレチア・ボルジア（一四八〇－一五一九。チェザーレの妹で、文芸・芸術を擁護したが、父アレクサンデル六世や兄により政争の具にされた）等を輩出した。

（5）Les Valois。カペー王家の分家で、一三二八年から一五八九年までフランスに君臨した。初代シャルル・ド・ヴァロワが王位に就いた時、フィリップ四世の孫であるイギリスのエドワード三世がフランスの王位を主張し、これが原因となって百年戦争が起った。直系のヴァロワ家の後にオルレアンのそしてアングゥレームのヴァロワ家が続いたが、アンリー三世（アンリー二世とカトリーヌ・ド・メディシスの第三子）が後継者を持たずに没して、王位はヴァロワ家からブルボン家へ移った。

（6）Cherbourg。コタンタン半島の北端、英仏海峡に臨む港町で、ヴァローニュの北西二〇キロメートルの位置にある。

（7）Le château de Tourlaville。シェルブールの東五キロメートルにトゥールラヴィルの町があり、そこから更に南に約一キロメートルの位置にルネサンス様式の城がある。

（8）この家族名 la famille de Ravalet は「失墜させる」と訳した動詞 ravaler（下げる、格下げする、おとしめる、失墜させる）に、またその過去分詞 ravalé（失墜した、堕落した、卑しい）に通じる。

（9）原文では英語 outlaw。

（10）九柱戯 jeu de quilles は、立てられた九本の木柱（ピン）quilles を、球 boule を投げて倒す、ボーリングに似た遊び。

（11）Caïn。旧約聖書、「創世記」第四章に登場する人物。アダムとイヴの長男で、弟のアベルを嫉妬のために殺し、

ド・ハロルドの巡歴』などによって有名になってから、他の多くの女性と同様に、彼女と関係を持った）を想起させると言われる。

（18）Armide［伊 Armida］。ルネサンス期のイタリア詩人タッソ le Tasse［伊 Tasso］（一五四四－一五九五）作の叙事詩『エルサレム解放』*Jérusalem délivrée*（一五八〇）に登場する魔法使いの女。フランス人の騎士ルノーを魔法によって誘惑し、宮殿に引き留める。――誘惑の大きさ強さを象徴的に語るための引用。

（19）Les Enfants d'Édouard。ポール・ドラロッシュ Paul Delaroche（本名 Hippolyte de La Roche、一七九七－一八五六。フランスの画家で、主に歴史に題材を得た）の一八三一年制作の絵。「エドワード」はイギリス王。

（20）ギリシアの悲劇作家エウリピデスの作品等からアイデアを得た、ラシーヌ Racine, Jean（一六三九－一六九九）作『フェードル』*Phèdre*（一六七七）の主人公。王妃フェードルは不在中の夫テゼーが死んだという知らせを信じて、義理の息子イポリットに恋を打ち明ける。しかし王子は若い娘アリシーと相思相愛の仲で、それを知らないフェードルは、不意に帰還した王に向かって、イポリットが罪を犯そうとしたと告げる。一旦は真実を打ち明けようとするが、イポリットがアリシーを愛していることを知って、彼女は嫉妬に荒れ狂い、口を噤む。テゼーは復讐心からイポリットを死地へと追いやる。

（21）この「マドレーヌ」という名と、次行の「エルサレムの娘」という呼び方は、いずれもマグダラのマリア Marie Madeleine, Marie la Magdaléenne を指すと考えられる。彼女はイエスにより七人の悪魔から解放され（「新約聖書」、ルカ伝、第八章・二）、やはり彼によって病や悪霊から救われた女性たちや一二使徒とともに、「神の王国」を説くイエスの遍歴に、ガリラヤから付き従う。イエスがゴルゴタの丘を登る時、嘆く彼女たちに向かって彼は、エルサレムの娘たちよ、私のために泣くな、むしろお前たちのため、お前たちの子供のために泣けと諭す（同書、第二三章・二八）。彼女たちは磔刑の場に立ち会い、週改まって墓に赴くと、二人の天使が、

と思われること。（Barbey d'Aurevilly, *Œuvres romanesques complètes*, «Pléiade», t. II, p. 1361）

（16）Chateaubriand, François René（一七六八－一八四八）。最初『ルネ』*René* は、『アタラ』*Atala* とともに『ナチェーズ』*Natchez* の一挿話として書かれたが、一八〇二年に『キリスト教精髄』*Génie du christianisme* の中に組み入れられ、一八〇五年に単独で出版された。自伝的な要素を含み、抒情的な文体で書かれたこの小説において、シャトーブリアンは目的のないままに消尽される曖昧な情熱や、それに起因する憂鬱を描き、その主人公ルネは、期待を裏切る現実を前にして抱く無限の渇望、「世紀病」と呼ばれることになる絶望的な憂鬱を体現するロマン主義的な人物の最初のモデルとなった。ルネの姉アメリーは、弟に対する近親相姦的な愛に恐れを抱いて修道院に入り、ルネは絶望してアメリカに渡るが、その地で姉の死を知る。

（17）Byron, George Gordon Noel, lord（一七八八－一八二四）。イギリスの詩人。ロンドンで生まれ、ギリシアで客死した。『チャイルド・ハロルドの巡歴』の成功によって一躍時代の寵児になった彼は、他にも『海賊』、『マンフレッド』、『マゼッパ』、『ドン・ジュアン』などによって豊かな創作力を示し、フランスロマン主義にも多大な影響を与えた。――バイロンは『パリジナ』*Parisina*（一八一六）において、義理の息子（夫の庶子）と恋愛関係（近親相姦）に陥り、夫（フェラーラのエステ侯爵）の命により、その息子とともに斬首されたイタリア人女性パリジナの愛と死をロマンティックに歌った。歴史家ギボンの史書に見つけた記述に基づいて書かれた詩。――『マンフレッド』*Manfred*（一八一七）は、罪の意識に苛まれた孤独なマンフレッドが、山の精や運命、ネメシス（応報天罰の女神）などと対話し、かつての恋人（彼らは愛し合うことによって致命的な罪を犯した）の亡霊に話しかけるが、神に救いを求めることもなく、絶望したまま、ユングフラウの頂上から転げ落ちて死ぬという内容で、ゲーテの『ファウスト』などからヒントを得たとされる詩劇。かつての恋人の亡霊は、バイロンの異母姉オーガスタ（父とその前妻との間の娘で、バイロンは十代半ばに彼女に初めて出会い、後に『チャイル

その激しい調子から〈文芸の元師〉という揮名を彼にもたらすことになる長年にわたる活発な批評活動の傍ら、彼は本来の志である創作活動も持続的に行い、『古い愛人』（一八五一年刊）、『魅入られた女』（一八五四年刊）、『騎士デ・トゥーシュ』（一八六四年刊）、『既婚司祭』（一八六五年刊）などを世に問い、『魅入られた女』がボードレールによって高く評価されたということはあったが、この方面における名声は容易にやって来ず、ようやく『魔性の女たち』（一八七四年刊）によって世間の注目を集めるが、その瀆神的でスキャンダラスな内容のために刑事訴追を受け、販売停止を受け入れることによって免訴となる。この中篇集は彼の特質を最も良く発揮した作品集となった。心の襞に織り込まれた不可知の厚み、内に秘めた情熱の激しさ、激情の不意の奔出と予想外の暴力的行為、人間存在の深部を一瞬照らし出す不吉な光、物語の急激な展開と残された闇を焦がす夢想の火花、饒舌な語りを唐突に打ち切る沈黙の最大限の効果――こうしたことを、言葉や比喩やイメージを重層的に織り成した絢爛たるかつ陰翳に富んだ文章で描き、書いた。代表作となったこの作品の後、彼は更に晩年の作として『名状し難い物語』（一八八二年刊）、『歴史の一頁』（一八八六年刊）を残した。

『歴史の一頁』*Une page d'Histoire (1603)* が初めて《ジル・ブラース》紙に発表された時（一八八二年）、「ヴァローニュからの帰還。バイロン卿の未刊の詩」と題されていたように、また実際にテクストの中でバイロンの名を引用していることが示すように（訳注（17）を付した件を参照）、この作品はイギリスの詩人の影響下に（バルベーは彼の詩の句読点まで覚えていると自慢した）、一種の散文詩として書かれた。

執筆の出発点の一つに、ポントーモンという人物がラヴァレー家について書いた略述をもとにバルベーが記したメモがある。このメモには、一四八〇年にラヴァレー家がブルターニュからノルマンディーに移り住んだこと、一族の者たちが次々に野蛮な殺害行為を行ったこと、ジュリヤンとマルグリットが一六〇三年にグレーヴ広場で斬首されたこと、城に見出されるマルグリットの肖像画、落書きと墓碑銘など具体的な記述が見られ、これが『歴史の一頁』

予言通り死の三日目にキリストが復活したと告げる（同書、第二四章・一－一〇）。

（22）Blois。ロワール河沿いの町で、ロワール＝エ＝シェール県の県庁所在地。

（23）バルベーは、マルグリットと、その遠縁（petite-cousine）に当たるマドレーヌ＝マルグリット・ド・ラヴァレー Madeleine-Marguerite de Ravalet とを混同しているのだろうか。ある歴史家によれば、人頭税の収税吏であったジャン・ル・フォコニエ Jean Le Faulconnier（バルベーのテクストでは Jean Le Fauconnier）と結婚したのは後者のマドレーヌ＝マルグリットの方で、その結婚式に出席したマルグリット自身が結婚した相手はジャン・ルフェーヴル Jean Lefèbvre という名で、この男はジャン・ル・フォコニエの甥に当たり、結婚時にはやはりヴァローニュの人頭税の収税吏になっていた。（Michel Carmona, *Une affaire d'inceste: Julien et Marguerite de Ravalet*, Perrin, Paris, 1987, p. 19, pp. 29-30 による）

これがバルベーの間違いだとするならば、訳注（21）を付した「マドレーヌという名前でも呼ばれていたこのマルグリット」という件は同じ混同に基づくものと考えられる。また、「マドレーヌ」という名は、当のマルグリットの母の名でもあり、妹の名でもある（*Ibid.*, p.17）ので、彼女は複数の「マドレーヌ」に取り巻かれていたということになる。

（24）前注（23）で援用した Carmona は同書で、ラヴァレー兄妹が埋葬された教会の名をサン＝ジャン＝ド＝グレーヴ教会 l'église Saint-Jean-de-Grève としている。（*Ibid.*, p.95）

【訳者解題】

バルベー・ドールヴィイ Jules-Amédée Barbey d'Aurevilly は、一八〇八年一一月二日コタンタン半島のサン＝ソヴール＝ル＝ヴィコントに生まれ、一八八九年四月二三日にパリで没した。

更に、そして先ず何よりも、この晩年の短い作品には、それまでの長い年月にわたる著作活動によって培ってきた小説家の主要テーマや美学が集約されている。近親相姦、罪を犯しつつなおも罪を凌駕しようとする情熱の激しさ、罪の中にさえ／にこそ存在する幸福、死をも乗り越えようとする愛、先祖（一族）の罪が子孫にまで及ぼす強大な影響、人間本性の謎とそれを覗き見ようとする欲求、知っていることと知らないこととの葛藤・補完、並外れたものへの偏愛、行為の過剰と血のテーマ……

こうしてバルベーは『歴史の一頁』において、歴史の一挿話から得た素材を軸に、自分に深く関わる問題・テーマを織り成し、それに個人的な印象と追憶と夢想の色を濃く滲ませた。この一篇の「詩」は『魔性の女たち』の血を受け継ぎながら、より簡潔な表現による、より個人的な作品になっている。「歴史の一頁」はバルベー個人の歴史の一頁でもある。

翻訳は Barbey d'Aurevilly, *Œuvres romanesques complètes*, textes présentés, établis et annotés par Jacques Petit, «Pléiade», Gallimard, Paris, 1964, 1966, 2 vol. に拠った。また〈訳注〉や〈訳者解題〉を書くに当たっては、同全集の注や解説を、そして各種の書籍、辞典・事典等を参考にした。

執筆の直接の材料となった。（Barbey d'Aurevilly, *Disjecta Membra*, La Connaissance, Paris, 1925, 2 vol. の t. II, pp. 73-75 参照）また、このメモの中で、バルベーはマルグリットの名をMarguerite-Madelaine de Ravaletとも記し、ジャン・ル・フォコニエ Jean le Faulconnierと結婚したと書いているが、既にこの時点で訳注（23）で触れた混同を犯していることになる（典拠とした文献そのものの中の間違いか）。

だが、歴史上の出来事を核にしているとはいえ、『歴史の一頁』を成立させているもう一つの重要な要素は、バルベー自身の思い出と夢と印象である。この作品が書かれたと思われる一八八二年の秋、彼はヴァローニュに滞在し、トゥールラヴィルの城を訪れている。その時の印象を彼は手紙に書く。一〇月一一日付で、ルイーズ・リードに宛てて、ヴァローニュに戻って来たこと、そこは自分にとって最初の物思いと最後の夢の町であり、死にゆくものすべてのように美しい秋の陽射しを浴びていることを報告している（Barbey d'Aurevilly, *Correspondance générale*, Les Belles-Lettres, Paris, 1980-1989, 9 vol. の t. IX, p.44）。一〇月二七日には同じ宛先に、シェルブールからそしてトゥールラヴィルの城から戻って来たが、かつて経験したことのない印象を受けたこと、城はエドガー・ポオに相応しい城で、それにまつわる物語を一篇の詩にしたいという気持を述べている（*Ibid.*, t. IX, p.52）。また一〇月二七日には、ブーグロン夫人に宛てて、城は驚嘆すべき芸術・風景であり、そこにアンリー四世治世下で一人の魔性の女が登場したのであって、彼女のことを彼はきっと書くだろうと告げている（*Ibid.*, t. IX, p.54）。ヴァローニュについては、この年に限らず既に長い間折に触れて手紙や『覚え書き』や詩（『ヴァローニュにて』）で感懐を述べてきた。青春時代に慣れ親しんだ町は変わってしまった。今や死に絶えて立ち現れるものは亡霊ばかりの寂しい町、バルベーにとっては孤独と憂鬱が支配する過去の思い出の石棺のような町、この町に対する変わることのない深い思い、断ち切れない愛着、それに加えてトゥールラヴィルの城から受けた滅びの印象、尽きない夢想、それらがこの作品を個人的な色に染め上げている。